

# 若 い ハ イ ネ

——ハイネ伝のために——(5)

木 本 欽 吾

## ゲルデルン家の人たち

前稿(4)で、少年ハイネの父方、つまりハイネ家の人たちについて、そのあらましの事柄が述べられた。つづくこの稿では、その母方、ファン・ゲルデルン (van Geldern) 家の祖先と、その中で、詩人ハイネの記憶に残って、彼の生涯に若干の影響を与えた人たちのことに筆をすすめたい。父ザムゾンの生活ぶりから察しられるとおり、少年はより多く「母の子」として、そうして母方の人たちから見守られて日々を過ごした。それは「回想記」の中で、次のように述べられる：わたしの母方の家族についてある程度詳しく書かれているのに対して、父方の一族や親戚については一言も触れられていないと非難する者がいるが、なにも故意に一方を持ち上げ、一方を無視したわけではなく、父はだれ一人身寄りの者もなく、よそ者としてここへ来たのだから、ハイネ家についての昔話をわたしに聞かせてくれる者も一人もいなかった。これと反対に、母の生家には、家伝につながる人や遺物の物語りをしてくれる古老たちがいた。とくにこの弁解は、父方の祖先が、母方のそれと比べようもなく、当時のユダヤ人たちの中で低い生活者層の中に位置していたかのような誤解を取り除こうとした言葉であると思われる。たしかに、これから述べられるように、母方の祖先の人たちは、ハイネ家の人たちよりも比較的に優位に立っていた。しかし、それは「回想記」の作者の筆先きを鈍らせるほどのものではなかった。

以下に、ファン・ゲルデルン家の父祖たちの世代交代の模様を見てゆ

く。始祖といわれるヤーコブ (Jakob van Geldern) が、その発祥地、オランダのゲルデルン村から、ユーリヒーベルク公領へ移住して保護状を手にしたのは、父方イサーク・ハイネがビュッケブルクで保護ユダヤ人となった時期と同じ頃の、1628年である。公領主のプファルツ選帝侯の恩寵をうけて出入りを許される宮廷御用商人として、デュッセルドルフに定住することが出来た。二代目のイスラエル、始祖と同名の三代目のヤーコブにいたる、1650年の頃は、この地に居住を許されたユダヤ人は数家族にすぎなかったが、ゲルデルン家はユダヤ人代表として公領主から重用されたけれども、保護ユダヤ人の域を出なかった。

ファン・ゲルデルン家が宮廷御用商としてその地位を一段と高くするのは、四代目のヨーゼフ・ヤーコブ (Joseph Jacob v. G. 1653-1727)、通称ユスパ (Juspa) の時からである。時の支配者は、ベルグ公領へも足をのぼすことのあった、プファルツ選帝侯ヨーハン・ヴィルヘルムである。その豪華な生活と、スペイン王位継承をめぐる戦い (1701-13)、それらに必要な物質の調達をユスパは担当する。緊急に発行された公領国債の利札を売り出して戦費を提供し、また、参戦部隊の糧秣を供給することによって、大きな利益を得た。1712年には、デュッセルドルフにゲルデルン家としては初めての、人目をひくほどの居宅を新しく構えることができたし、さらにユダヤ教会を創設する運びとなり、ベルク公領のユダヤ人代表に選ばれる。しかし、一方で、ユダヤ人の中の御用商人を目指す競争は、他の地域からの進出者によっても激しさを増し、また、調達した金は回収困難となり、その死に至るまでに、次第に劣勢に追いやられる不運に見舞われた。ブランデルブルク公領から諸方に、強い財力によって支配権を握っていたゴムペルト (Gompertz) 家が、公領内へもその手をひろげてきていたからである。

落ち目となったゲルデルン家を引き継いで、父ユスパのかつての勢力を

1) これについては、オランダではなくて、ユーリヒー——ベルク公領内の地とも言われている。

盛り返すのが、ラツァルス (Lazarus v. G., 1695-1769) である。未回収のままであった領主への用立金の見返りのようにして、1721年にはカール・フィリップ選帝侯から、宮廷出向の特権だけは維持することが許された。ラツァルスは、やはり敬虔なユダヤ教信奉者であったが、その性格は開放的で明るく、その邸に領主側近の多くの人たちまで集める社交性を持っていた。つぎつぎとベルク公領主となるプファルツ選帝侯たちが芸術愛好など、一般に浪費も意としない贅をつくした生活慣習をもって支配した首都デュッセルドルフの環境に育ち、一時期をウィーンで過ごしたラツァルスの体験が、やがてゲルデルン家へ、単なる宮廷御用達の商家とは異なり、文化、芸術への理解をも持つ特色を伝えることとなる。これはひとりラツァルスの人柄によって生れてきたものではなく、その妻の助力も与っていたにちがいない。妻となった人は、当時はドイツ皇帝でもあったレオポルト一世治下のウィーンで、貨幣鑄造の役をつとめて、宮廷出入りを許されていたプレスブルク (Preßburg) 家の出であり、ラツァルスが新らしくデュッセルドルフで居を構える前は、ウィーンの義父のもとでその仕事を援けていたのである。二人の間に男女十人の子たちが育つ。息子たち四人を出生順にみると、シモン (Simon)、ミヒャエル (Michael)、ゴットシャルク (Gottschalk)、早逝するヨーゼフ (Joseph)。次男だけが商人となっている。当時の世界を股に掛けた人、少年ハイネの大伯父シモン、医者となった祖父ゴットシャルクについては後に述べられるが、六人の娘たちは、それぞれの口から、少年に母の家に伝わる歴史を物語ってくれた——そのように「回想記」に書きとめられている大叔母たちである。ゴットシャルクが医業の道に進んだことは、ゲルデルンの家系の中でも、強く注目される事柄である。これは、ただこの一家に限られず、父のラツァルスの世代、つまり十八世紀に足を踏み入れたユダヤ人たちを取り囲む、当時の新しい時の流れを背景にしている。この一家がその中で、どのようにその後裔の進路に光を与えるのか、それについて、L. ローゼンタールはこう述べてい

る：「四代目のヨーゼフ・ヤーロブもすでにヨーロッパの文化に関心を寄せ、五代目ラツァルスにいたると、ゴットシャルクのほかにモーゼス・エマヌエル (Moses Emanuel) などに、哲学、自然科学、言語の勉強を受けさせている。それでいて、ゲルデルンの祖先たちは、ユダヤ教を心から信奉しつづけている。この家族には、医学の分野で勝れた人たちが三代にわたって出てくる。……」このゴットシャルクに先がけて医者となったモーゼス・エマヌエルは少年ハイネの大伯父だといわれるが、そのほんとうの姿は筆者には不明である。

六代目にあたるゴットシャルク・ファン・ゲルデルン (1726—95) は少年ハイネの祖父である。ジープルク (Sieburg) のラビであったボック (David Pinas Bock) 家出の妻サーラ (Sara) との間に、もうけられる子たちは、二人の息子、ヨーゼフ (1765—95)、シモン (1768—1833)、そして未婚のまま亡くなる娘、ヨハンナ、近くの地主に嫁したファニー、末娘として、やがて少年ハイネの母となるエリザベートたちである。長男ヨーゼフが父と共に、医療にたずさわる期間は数年を出でず、短命におわった。さきのモーゼスとあわせて、ゴットシャルク父子の三人は、デュッセルドルフの町医者として、多くの町民の命を守り、ゲルデルン家の名は町の外にも広く知れわたった。詩人ハイネの記憶の中にも、とくにこの伯父ヨーゼフの名は、長くとどめられていて、たとえば1835年に求められて書いた「自伝」の下書きには、宮廷顧問 (Hofrat) の役職名を添えている。<sup>3)</sup> 後のマクシミリアン・ハイネの「ハイネ回想」文の中でも、侍医ヨーゼフと呼んでいるし、<sup>4)</sup> プファルト選帝侯カール・テオドールに愛せられたのであろう。

「回想記」の中に見られるのは、祖父ゴットシャルクをしのぶ文である。ゲルデルン家の二階に少年は上って行く。ほの暗い屋根裏部屋であっ

2) Ludwig Rosenthal, 前掲書 S. 65

3) Briegelb, Heinrich Heine, V—592

4) Maximilian Heine, 前掲書 S. 6f.

た。生きものといえば、家の飼ひ猫だけがじゃれて動き廻っている。塵と埃、徹くさい。何を求めて少年は足を運んだのであろうか。その階上ではとんど終日を過ごすことができたのは、最上の喜びであった。それは誰でもが、少年時代に穩れた部屋に忍み込んだ時に、嘯みしめる不安と好奇、そうして驚きとのまじり合った喜びである。雑然としたガラクタ部屋であるが、文中では「ノアの箱舟」(die Arche Noäh)とも言われる。少年が発見するものは、祖父ゴットシャルク愛用の遺品、飾りのついた、錆びついた刀をはじめに、父ザムゾンも付けた鬘、部屋の片隅にころがる母の少女時代に吹いた笛など。その音色を楽しんで、しかし父を不機嫌にするために、こっそりこの部屋で口に添えた笛である。地球儀、惑星の図表、大きなフラスコ、それに蒸留器も見つけられた。星占い、錬金術に祖父は興味を持っていたのであろうか。ひとまとめにして箱にはいった書籍の中に、未知の世界を探求する神秘の科学書がある。大部分はやはり医学書であったが、パラツェルズスのような中世の医者で哲学者の本も出てきた。さきローゼンタールが、ゲルデルン家のより新しい伝来の家風に、サイエンスへの関心と傾向とを述べているのは、この「回想記」の記述に拠ったものであろう。さらに少年は埃をかぶった別の箱へ手を伸ばし、奇妙なメモ帳を掴む。だが、これについては数段さきに行を改めて述べることにする。「ノアの箱舟」は思わぬ方向へ、少年の空想を乗せて流れて行くのである。祖父ゴットシャルクについては、少年が手に取って見る遺品を通してのほかには、知ることが出来ないが、音楽好きだった母へ理解を示さなかったことは、その人柄の一つを示している。いずれにしても、この祖父の代から、それまでの単なる御用商人ゲルデルンの家名は、医家ゲルデルンとして、デュッセルドルフに周知のものとなった。後に詩人ハイネの書いた自伝記類を見ても、次の二つの記述の中に、祖父についての数行を読むだけである—「ル・グラン書」の第6章：デュッセルドルフの地に葬られた人びとの中から、祖父ゴットシャルクと、同じ大学で医学を修めたその長男ヨーゼフを思い出して、「……二人ともにこの地でその名を

知られた医師で、多くの病人を手がけてその命を救った」。また、「告白」(Geständnisse)の中で、少年がやがて学ぶことになるギムナジウムの校長シャルマイアー先生を重い病気から救ったのは、この祖父、と述べているにすぎない。むしろ、祖父と同じ道を進んだ弟マクシミリアンのほうが、その姿をいつまでも記憶にとどめている。ただ、その祖父は、マクシミリアンの出生前に亡くなっているのだから、肖像画の中の祖父、母からの言い伝えの中の祖父である。赤い礼服をつけ、見事な色合のカフスをのぞかせ、金のバックルを締めて、細い剣を腰に吊している、いかめしい姿で、まるで肖像画におさまった人のようにしるされている。その画像から歩き出して来たように、祖父は生まじめで、無愛想で、風変わりなところがある。少しでも暇があると専門書に読みふけるか、器械類を手にしている。とくに、家庭内では娘たちへの躰がきびしく、楽器の練習となると、それはぜいたく品であり、時間の浪費であるとして禁止する。母は、その父ゴットシャルクと肌合いが違って、心底からの音楽好きで、ピアノなど、どんな小型の物であったとしても、父に見つからずにはすまない。しかたなく母は、整理ダンスか愛読書の中へまぎれ込ませることのできるフルートを選ぶことを思いつく。練習時間は父の留守中で、かなり上達してから、母は兄グスタフ相手に、だれかの二重奏曲を吹いていたのをマクシミリアンは思い出しているし、このフルートの音が、時どきゲルデルン家を宿にしていた父ザムゾンとの縁結びになった、と述べている。

前述の「ノアの箱舟」の屋根裏部屋へ上って行くことを許してくれたのは、その時のゲルデルン家の主人であったシモン伯父であった。母の兄である。続けて書かれているように、そこで過すことのできた二、三日は、少年にとって、不思議な喜びの連続する自由な時間であり、その空想力の培養土になる。しかし、ほんとうに少年の心を神秘の世界へ誘ったのは、祖父の遺品ではなくて、ついで少年がさぐり当てたメモ帳であった。この遺品について述べる前に、少年が階段をききませて上って行くのを見る伯

5) Max. Heine, 前掲書 S. 6

父シモンに、しばらく筆をとどめたい。父ザムゾンの店にも姿を現わし、ザムゾンを助けようとして力及ばなかったあの人であり、「母に次いで、わたしの精神を培うのに大きな力のあった」伯父である。メモだけを残した大伯父シモンはいわば、「幻の人」であるが、伯父シモンは、少年がその顔、その声を知っている実在の人であった。小柄な、ギリシャ人に似たところのあるこの伯父は、細く長い鼻にいつも指を伸ばす癖を持ち、あんまりひっぱるから、そんなにのびたんでしょ、と少年と弟妹たちがからかうと、急に顔をひきしめて厳しく子供たちを叱りつける。父ザムゾンとちがって、同じ織りでありながら、身につけている物は流行遅れ、ザムゾン商会の店内にあった新しい商品にまったく関心を寄せもしない。支配人としてこの店に坐るときも、「回想記」にあるように、多くは黙って新聞などひろげていることのほうが多かったのであろう。少年ハイネたちの眼には、こうしたしんねんむっつりの伯父は近づきにくいものだったが、他方からすれば、その胸のうちには世俗的な名誉心など物の数に入れぬ、誠実と高潔の風を周囲にただよわせて、子供たちにいつの間にか尊敬の気持を植えつける。だが、こうした伯父にも人間らしい血潮は流れていて、大市の祭りの華やいだ気分を好んで人込みの中にまじり、時には酒場へ足をむけることもある。ただ、そうした生き生きとした感情に、父ザムゾンがしたように、身を任せることはせず、真実と正義の前では、何のためらいもなく、理性の人に立ちもどり、その周囲に殻をつくる。伯父はそこに殉教者のような顔をして坐っているのである。しかし、その外の世界に対する態度には、頑固一点張りではなく、自己抑制に加えて自己卑下さえ見える。このような資質は、ゲルデルン家の人たちには珍しいもので、兄ヨーゼフが父の後を継ぐようにして医学の道を志したのに、この人は、イエズス会付属の高等専門学校の人文学科へ進み、ラテン語を主とする古典学を選ぶのである。父ザムゾンが織物商から次第に流行服飾品にぬめり込むのに、伯父シモンのマニアは、古書籍、古雑誌の収集にまで及ぶ。しかし、伯父は本の虫でありながらも、モノマニーではなくて、刻々に動くデュッセル

ドルフ周辺の世情を黙視できぬらしく、ライン地方の新聞の協力者となつて、一家言を寄せようと憑かれたように筆を走らせる日がある。出来上る文体は、その素養となったラテン語のためか、お役所の通達文臭があり、もうギムナジウムへ通っていた頃でもあろうか、たまたま見かける幼い甥の文章にはなじめぬらしい。軽すぎる、無駄が多い、品がない。少年にとって、それでもこの人は、父には求められぬ何かがあると思われるのである。「回想記」の作者は、しかし、この伯父が熱心に、わたしの精神の向上を助ける手段をあれこれと教えてくれたのは、たいへんわたしに役だった、と言ひ、つづけてこうも述べる：わたしの精神が形をととのえるのに大きな影響を与えたこの伯父に限りなく感謝している。伯父とわたしの考え方がどんなに違つていようと、伯父の文筆による努力がわずかの実だけしか結ばなかったとしても、それはたしかにわたしの胸の中にいつか筆をもって立とうとする意欲を呼び起してくれたように思う。机に向つて坐っている伯父、その傍らに立っている小さい甥。伯父の作文についての注意を、甥は上の空に聞いている。そのために伯父は幾冊かの本を甥に見せさえもする。甥の視線は活字の上をすべって本の外へ出ている。伯父にはこのようなひたすらな文筆への執念がある。「回想記」にはこう書きつづけられている：伯父から幼いわたしは贈り物として最も美しい、最も貴重な書籍をもらっていた。それに、伯父の愛蔵書、ギリシヤ・ラテンの古典書、大切な新しいパンフレットなどを、わたしの自由に任せて読ませてくれた。そればかりか、祖父の遺品まで、箱の中をひっかき廻して捜し出すのを許してくれた。成人してからの詩人ハイネとデュッセルドルフを生涯を通じて離れなかったこの伯父との心の交流は明かではない。1833年パリからK. A. ファルンファーゲン宛の書簡で、3月始め伯父の訃報を受取っている。この時は、ファルンファーゲンの妻ラーエルが死去して間もない深い悲しみのさなかにあり、周囲の友たちと共に親しい血縁者との別れに、ヘンを握つたまま涙をぬぐいつづけている。散文作品として高い評価を得ていた「旅の絵」(Reisebilder) 第3巻を伯父に送つたのは数年前であ



6) 弟マクシミリアンはこの伯父シモンについて、在野の博学者、ライント地方雑誌の熱心な協力者、そうして誠実な人間の模範、兄ハイネはこの人をとても愛していた、と述べて、その「回想記」に伯父の姿を見事に書きとめて、尊敬に値する、この人独自の特徴を、現存の人のようにわたしたちに見せてくれた、<sup>7)</sup>と言っている。伯父シモンは、ゲルデルン家の中の「奇人」であった。ようやく医療を家業としてゲルデルン家に定着させようとしていた時、祖父ゴットシャルクと長男ヨーゼフは年を同じくして没してしまう。もし祖父が長男の短い命運を計り知っていたとすれば、最後の病床で祖父はどんなに悲しんだであろう。そうして、厳格な人としてゴットシャルクは、変わり者に見えるシモンをどう観察していただろうか。「不肖の子」であったのであろうか。公職につかず、豊かな学識を持ちながら在野の人として終るシモン、それは最初からシモンが意図したことであっただろうか。当時ナポレオンの支配下にあっても、ユダヤ人が公職につくことは、やがてプロイセンの支配力が伸びてくる時代においては、まったく不可能であったこと、それを、父ゴットシャルクは身をもって知っていたに違いないし、やはり悲しみをもって予測していたに違いない。少年ハイネを、弟マクシミリアンも言うように、このシモン伯父は人一倍愛していた。書物をさがし廻る甥を、伯父はどういう思いで見えていただろうか。両親の死後、生涯を独身のままに、デュッセルドルフに踏みとどまったシモン、その死と共に、少年ハイネの末弟グスタフが母方の姓を名のったことがあったが、その実はこのシモンをもってゲルデルン家は杜絶える。ここで、もう一人のシモン、おそらく当時実在していたならば、少年の心をさらに強く惹きつけたにちがいない、大伯父シモンの事へ筆を移すことにする。

前段で述べられたこと、少年ハイネが伯父シモンに案内されるようにして上って行った屋根裏部屋で、祖父ゴットシャルクの遺物を掻き廻した後

---

6) Hirth, Briefe Nr. 282

7) Max. Heine, 前掲書 S. 5

に、やはり埃にまみれた一つの箱へ手を伸ばして一冊のメモ帳を捜し出すことから、この段では書きついでゆく。それは、祖父の兄、伯父と同名の、大伯父シモン・ファン・ゲルデルン(1720—74)が遺していた備忘録で、少年にとっての「最も貴重な収獲物!」であった。手にした瞬間、ゲルデルン家の大おば、おばたちから語り聞かせてもらったことのある人、風がわりな「聖者」姿であった、「騎士」、あるいは「東洋人」という綽名で呼ばれたあの大伯父を思い起した。「回想記」の中で、その記事は父母たちの思い出に次ぐスペースを占め、その描き方も、まるで自己告白のようである。「騎士」シモンと言えば、その周囲の貴婦人たちに扇のかげから美しい顔をのぞかせて流し目などをそそがれる、「東洋人」シモンと言えば、エキゾチックで、その顔付き、肌もヨーロッパと異色のもの、小アジア、中近東、はてはアフリカを渡り歩いた人を思わせる。十八世紀半ば頃のことである。大伯父シモンの眼は、ベルク公領から遙かにフランス、イタリアを超えて遠くの世界へむけられた。以下に、まず「回想記」から、シモンの足跡を辿ってみよう。最初の頃シモンが最も長く足をとめたのは、北アフリカのモロッコである。その途中、エルサレムに巡礼し、モリア山上で祈禱をつづけているうちに、一つの「幻覚」をみる。それがどんな神のお告げであったのかはしるされていない。北アフリカと中近東とを歩き廻るうちに、刀剣づくり、乗馬と馬の飼育の方法まで心得て帰り、人びとを驚かせる。部族の首領に選ばれたかと思えば、盗賊団の首領となった日もある。滞在するほとんどの土地では、その宮廷に、いつの間にか出入りを許される。そこでのシモンの立居振舞をこう述べている。——彼が長く足をとめた各地の王侯、領主の館では、持前の美貌と立派な恰福、また見事な東洋風の装いで人目を惹きつけたのですが、とくにその衣裳は婦人たちに妖しい魅力を与えました。それに彼がいちばん人びとの尊敬を集めたのは、そのいわゆる秘術だったと思われます。——シモンは、ユダヤの秘教カバラに通じていたようだ。巫術が成功し、予言が的中することもあったのか。しかし、心のおごりから、高名の貴婦人との情事があからさまになって、

生命の安全を期するためには、無一物で逃亡するほかなく、その際あの乗馬術が役立った。ロンドンへぶらりとやって来たのはこの事件の後で、この避難所では苦しい毎日の生活をしている。少年ハイネが、デュッセルデルフ図書館の書棚によじのぼって、偶然に発見した旧約聖書「出エジプト」記に関係する表題の本は、ここで印刷されたもので、オラトリオ形式の、序文は英語、本文の韻文劇はフランス語で書かれていた。シモンの使える外国語はさらにその数が多く、メモ帳によるとアラビヤ、シリア、古代エジプト系の単語まで出てくる。メモ帳を手にして坐り込む少年ハイネが、その時うけた印象を、「回想記」ではこう書いている。——正体のつかみにくい謎の人、この大伯父はそうでした。彼が送った生活は、十八世紀の始めと中頃にだけ可能だった、風変りなものでした。彼の半身は夢想家で、世界を家とし、世界を幸福にするという夢のような理想のために宣伝をする。半身は幸福を追い求め、あくまで自分一人の力を信ずるという自覚の上に立って、腐敗した社会の朽ちた柵を破り開き、あるいはそれを飛び超える人でした。とにかく、どこからみても彼は立派な人間でした。——大伯父シモンの行動の中には、一つの理想、それはエルサレム巡礼のときの祈りのさ中に見た幻覚でもあっただろうが、その理想を実現するための手段として、山師のようなところがあり、その巫術には詐術のようなものが見られたかもしれぬが、それはけっしてありきたりの山師でもなく、悪徳の魔術師でもない。大伯父の正体は、彼の生きる時代を超えようとする、新しい人間の型であっただけに、その時代までの旧い人間観からはとうてい掴みえないものであった。つづく「回想記」の記述はもう屋根裏部屋を下りて、学習と遊びの、ふだんの生活へもどってからの、大伯父シモンの印象記である。その残る部分を最後にまとめてみる、——この大伯父は幼ないわたしの空想力を、異常なまでにつぎつぎと掻きたててきました。〔…〕わたしは彼の運命の浮き沈みなどを思い、すっかり我を忘れたありきまで、晴れた明るい昼間に、よくふと不気味な気持ちに襲われることがあって、わたし自身が亡き大伯父であるかのような、それにわた

しの日日は、あのとうに亡くなった人の続きものにすぎぬという気がしました。夜になると、その同じ気持ちが夢に写し出されて、昔のことをあれこれと懐かしんだものです。[……]この夢の中で、わたしは自分を大伯父とすっかり同一人に見たてていたのですが、それでいて、わたしは別の人間だ、時代もちがう、そう思うととてもこわい気持ちになるのです。[……]あるとき、わたしが父に、ちょっとした失敗を言いつくろおうとして、ひょっとするとあの人の生き霊が、わたしなのでは……と言うと、父はいたずらっぽく、あまえ、大伯父さんからだな、いつかおまえを支払人にした手形が振り出されるようなことがあっても、けっしてそんなものにサインなどしないでおいてほしいもんだな、そんなことを言いました。——父ザムゾンと少年は、あるときには、この大伯父シモンを話題にしたことがあるにちがいないし、父も息子に与えられたシモンの影響の深さを、いくらかでも知っていたにちがいない。

さて、この「謎」の人と言われた大伯父シモンの正体については、これまでにかなり明かになっている。その一つは、M.ブロートの「ハイネ」<sup>8)</sup>評伝で、その冒頭に「東洋人」(„Morgenländer”)として紹介されている。そこで扱われている資料は、1) D.カウフマンと 2) F.ハイマンのシモン論<sup>9)</sup>である。断っておくが、筆者にはこれらは未見のものである。ブロートは、1)については、その抄訳の労を多とし、さらにユダヤ精神史に重要な史料となる他の部分を併わせて、その完訳をつよく期待している。しかし、カウフマンのユダヤ人、ユダヤ教に対する照準の向け方、その態度については大きな疑問をさしはさんでいる。カウフマンはシモンを、例えば、冒険家、ユダヤ神秘主義者、社交家、芸人、さらには物乞い、享楽主義者ときめつけているとして、この風変わりな人間シモンの持っていた、純朴で不安に満ちた眼に気づかず、また、その変転するさまさまの不幸に耐

8) M. Brod, 前掲書 S. 1~9

9) 1. David Kaufmann, ヘブライ語で書かれたこの「メモ帳」の抄訳(1896)。

2. Fritz Heymann: Chevalier von Geldern, Amsterdam 1937

えてゆく運命にもさして共感を寄せていない点を不満としている。プロートは、シモンのその眼に、近代ユダヤ人の先駆者の面影を見ており、不運と幸運との谷間を歩きつづけるシモンに、やがて成人してゆくハイネの姿を重ね合わせるのである。「回想記」にもしるされている、シモンの好んだ合言葉のようなフランス語句、「無邪気さの失われるところ、生きることは罪なり。」は、上述のプロートの「シモン」観をそのまま言い現わしているといつてよいだろう。こうした点から、カウフマンの、いわば表面だけをとらえた浅い観点と比較して、2)の、後にヒトラー時代にアウシュヴィッツで殺害されるハイマンは、シモンの行動をより幅広くとらえており、1700年初期の時代の流れに、禁欲的なユダヤ教徒と享乐的な一人の人間との二つの殻をおのおの自由に突破しようとして、矛盾にあふれる行動で対抗してゆく過程がそこに示されているのを、プロートは高く評価している。シモンの何かに追われるように歩きまわる姿は、漂泊者であり、また巡礼者であった。ハイマンの、いわゆる「愉快な老愚者」はシモンの最後の姿であろう。しかし、シモンの遺した、ほとんど自分自身でその伝記を編むために書きつけたとも思われるメモ類は相当の量のもので、1)のカウフマンの場合は別として、2)のハイマンの場合も未だ十分にシモン生涯（その晩年及び死没の年も含めて）を、当時手にした資料のみでは、とうてい明かにすることは不可能であった。

シモン・ファン・ゲルデルンのメモ帳への関心、というよりもむしろ、広くはユダヤ人、狭くはゲルデルン家の歴史、その中で占めるシモンへの関心を持ちつづけたし。ローゼンタールは、これまで筆者がその労作にしばしば依拠している「ユダヤ人としてのハインリッヒ・ハイネ」の中で、プロートと同じように、シモン論に多くの頁を割いて<sup>10)</sup>いる。この部分は、別に二つの「シモン」論として本書の刑行と前後して「ハイネ年鑑」1).

10) Ludwig Rosenthal, 前掲書 S. 69~84

1973, 2). 1975年号に発表されており<sup>11)</sup>、本書のシモンの項の底本、あるいはその追記である。主としてヘブライ語で書かれた、この難解な関係資料の発見されたのは、すこし古く、1912年、場所はダルムシュタット図書館、発見者はその館長K. シュミット (Karl Schmidt) である。この遺稿は、1805年にH男爵からそのキャビネットといっしょに遺贈され、その後長く書庫に眠っていたものであった。さらにその発見者が、ヘブライ語に堪能で、十八世紀のユダヤ律法などに通じた学者の詳細な研究対象となるよう期待し、シモン・ファン・ゲルデルンの生活と運命のみならず、当時のユダヤ人社会及び一般の文化史にとって注目すべき成果が必ず得られるという確信を、フランクフルト紙で呼びかけたにも拘らず、遺稿を長い眠りから呼び覚ます人は、ローゼンタールをおいてはなかったのである。遺稿には、シモンが送り、また受取った書簡をはじめとして、本人のもらった推薦状、本人が出した諸種の願書、本人所蔵と思われる図書目録、住所録、その他こまごました証明書、受領書、父ラツァルス関係の文書など、中でも重要と思われる、1756年秋に始まるシモンの日記の第2部が含まれている。これら大小のシモン文書が、ダルムシュタットに遺られることになったのは、おそらくシモンがヘッセン——ダルムシュタット地方に十年間も滞在したことによるものだろう。

「回想記」の中に見られた、「ノアの箱舟」の伯父シモンの家の屋根裏部屋で、埃をかぶった箱の中から発見された「メモ帳」は、大伯父シモンの日記第1部ともみなされるもので、1756年秋で終わっているとされる。さらにローゼンタールに拠って、プロート以後の所論を補ってゆけば、このシモン日記第1部は、いつの間にかゲルデルン家の手を離れて長い間にわたってその行方が知れず、ようやくベルリンのユダヤ教区の図書館に姿を見

11) 1. Neue Blicke in das Leben u. die Persönlichkeit von Heines Großoheim Simon v. G.

2. Beziehungen des »Chevalier v. G.« zu regierenden Fürstenhäusern, hohen Staatsbeamten u. anderen Standespersonen.

られるようになった。ヒットラーが登場して来ようとする時で、その間三十年近くも経過していた。さきに挙げたF. ハイマンがベルリンでこれを見たのは1920年代で、そのシモン論の典拠としたものである。しかし、この手記も現在はどこにもない。やがて継起する恐ろしいユダヤ人迫害と共にその運命をしたのであろうか。既述のとおり、プロートが参照し、ヘブライ語の原典からの部分訳の努力を高く評価しながらも、その基本的な態度に疑問を投げかけられたD. カウフマンは、このシモン日記第Ⅰ部と若干の自ら収集した関係資料に拠って、その主著とされる「ハインリヒ・ハイネの祖先総覧から」に、その四分の一もの大きいスペースにシモン・ファン・ゲルデルンの項を割り当てた。<sup>12)</sup> プロートがはっきり不満を表明した書である。K. シュミットによって新らしく発見された、シモンの日記類なしに、困難なシモン研究に携わったカウフマンの、ハイネ研究の上で持つ意義は大きい。そこに誤解と誤測が生じたことはむしろこの種の研究過程では当然のことであり、観点をすこしずらせば、一般にこれらの誤った判断は正解への重要な捨石であると思われる。例えば、これはプロートの不満を正当化することが出来るものだが、カウフマンは、シモンを、ユダヤ教律法を厳しく守る、上層階級のユダヤ人家族ゲルデルンの中で、奇人ともみられる不安定な精神の持主、めったに見られぬ異常人と考える。シモンは、その家族のかちえてきた尊敬と名声とを、ヨーロッパ中の全教区に曳きずり歩き、それによって家名の傷つけられることをまったく意としなかったし、つつましやかなユダヤ教徒の顔をして各地で食客生活を面白おかしくつつけた、そう見るのである。それは、後に述べられるように、一つの判断、荒っぽい断定、誤りを含む推定であるが、たしかにシモン・ファン・ゲルデルンのほぼ三十年間にわたる旅、この旅そのものが、一つの目的を持ったものか、ただの流浪のための捨鉢な放浪であったかが問題であるが、その長い一見漫遊ともうけとれる旅全体の中に、カウフマンのシモンは存在しているのである。この事について、すこし前に筆をさしはさん

12) David Kaufmann: Aus Heinrich Heines Ahnensaal, Breslau 1896

でおいだが、「回想記」の作者の言葉をさらに詳しく掲げると、——大伯父の山師のような行動は、わたしも否定しませんが、普通に言われるようなものではなかったのです。つまり、ありきたりの、縁日などで農夫の歯を引き抜くヤブ医者でなく、身分いやしからぬ人たちの邸へ大胆に乗り込んで、いちばん頑丈な大臼歯を引き抜くのです。[……] 宣伝も商売のうち、という諺がありますが、生きることだってべつにかわりはなく、やはりひとつの商売です。世間で重きをなしている人に、ちっとも山師からぬものがありますでしょうか？ 控え目に身を処する山師ときたら、いちばんずるいやつです。さらに、——神様でも目的のためには手段をおえらびにならぬ、ととどめを刺すように、続けている。カウフマンは、この「回想記」の下りをどう読んだのであろうか。もう一つ、カウフマンのやむをえぬ誤ったシモンの最後についての推定のことに触れておく。シモンの生死没年については最初にしたとおりで、これがいわば公認のものである。カウフマンの、エルザスのフォーバッハ旅行の途上、54才で死亡、という推定年に因っている。ローゼンタールは、後で述べられるグレゴアール師 (Abbé Grégoire) のエッセーに拠って、エルザスで1788年秋死説を取っていたハイマンの想定を適切なものとしている。いずれにしても、シモン像はゆらぎつつづけている。

最後に、その手記によって、ゲルデルン家の系図をも明かにして、後の人のために遺したシモン・ファン・ゲルデルンの、1) 人柄と、2) その生活について、すでに「回想記」からその輪廓については紹介済みであるが、やや立ち入って要点を以下に述べてゆく。

1) : ゲルデルン家にとって1712年は、お家再興の記念されるべき年であった。ユスバ (Joseph Jakob v. G.) は、デュッセルドルフに最初のユダヤ教会堂も建造することができ、息子ラツァルスは妻と共に、義父シモン・ミヒャエル・プレスブルグでのしばらくの見習いを終えてデュッセルドルフへ、ウィーンで生れて二年目の長男シモンをつれて帰って来る。父ラツァルスの子弟教育の抱負は大きいものがあつた。一人はユダヤ律法研



究の学徒に、一人は医学徒に、漠然とながらそう考えられたのであろう。シモンと三男ゴットシャルクが順当に運ばばそうなるべきであった。だからシモンは四才でタルムードの手ほどきをうけ、八才で、祖父ユスパの手に成ったユダヤ教会堂での、父ラツァルスが巻物本の法典を寄進した奉納式で、ヘブライ語で献上の言葉を述べた。成長するにつれて、父は、その教養を広くするためにヘブライ語以外のヨーロッパ言語、哲学などの学習を受けさせる。ゲルデルン家の内側では、宮廷側近の高官たち、ユダヤ人上層部の商人たちの、いわばサロンがかもし出されていた。シモンは乗馬もこなし、フェンシングも、美術の趣味も、そうして、騎士にもふさわしい礼儀作法も身につける。だが、ある日に、それはベルク公領軍の糧秣調達役をしていた父の助手として、宮廷へ御用ききにもやられていた頃であったが、突然家から姿を消して、フランクフルトへ逃げ出した。シモンの放浪の旅がここから始まる。すでにシモンは、年上の二人の従姉たちに、一人はシモンの大叔父モーゼス・ホルン<sup>13)</sup>の娘、チッポーラ (Zippora)、もう一人は伯父の娘、フラアーチェ (Fradche) に愛され、性愛とはどんなものか、おぼろげに知っていたし、ユダヤ法典について若干の知識を蓄えた聖地巡礼者を思い、貴婦人たちに近づく騎士へのあこがれを持っていた。父ラツァルスの失望と怒りは当然のことである。シモンにとって、宮廷ユダヤ人家族の一員として、ゲルデルン家の伝統を継承してゆくことは、一人の人間として、その生涯を見とおした時に、あまりにも狭ま苦しいものと思われたのであろう。父ラツァルスが、その結果を招くことを予想だにしないままに、その息子に広いヨーロッパの一般文化科学を理解する素地を与えてしまっていたのである。しかし、すでに三十才に達しようとしていたシモン自身、自らが何を為すべきか、その目的をはっきり設定していたわけではない。以下に、ローゼンタールの豊富なシモン資料（日記第1部、第2部、その他、住所録ほかの諸メモ）を見渡して、その驚くべき広大な行動範囲（その遍歴地は数十ヶ所に達するだろう）の中の主要なもの

13) すぐ下の伯父と共に、Lazarus v. G.との続柄の詳細は不明。

を(しかし、これが主要であるかどうかは、読む者によって大いにその取舍選択の眼は異なってくるであろうが)、若干の私見をさしはさみながら列記してゆくこととする。シモンの最初の旅は、マインツにしばらく足をとめた後、ロンドン行(1747秋—49春)であった。その二度目は、ほとんど晩年期にあたる1771—1774年である。さらに、1777年にも短期間であるが、三度目の足を向けている。最初と二回目のロンドン滞在は、足かけ5年にも及ぶが、それがどのように過ぎたかは明かでない。フランクフルトからいきなりロンドンへ、それは考えられないが、なに一つそこでの消息はつかまえられるのだ。無用の憶測は避けたいが、デュッセルドルフからフランクフルトへ、父のきびしい眼から逃れるようにして家を出た当時のシモンの心をいちばん強くとらえていたのは、さきあげた二人の従姉たちのうちの、フラーチェであったのではないだろうか。プロートも述べていることだが、もし二人の意志どおりに運んでいけば、シモンのその後の行動はかなり違ったものになったかもしれない。晩年になって、シモンの夢にこの従姉は現われることがあったのだ。離ればなれになった後の若いシモンの生活に、それは空虚な穴を作り出し、そこから這い上がるためには、長い時間が必要である。フランクフルトその他においての、不明の時間は、やがて始まる旅への準備のためのものであるとも言える。少年ハイネが、シモンの叔母や姉妹たちから聞いた、「恰福のいい、堂堂とした体軀、袖、頸、胸にきらびやかな綾とりのある「東洋人」の服装をしたシモン・ファン・ゲルデルンは、その後の生活においてときどきそうであったように、外国語を教授したり、書籍商をしたりで、その日日の糧を稼いだであろう。カルタ遊びに金を賭け、たまに大金を掴み、さまざまの女たちと出会ったであろう。第一回の、一年半のロンドン滞在は、「回想記」の記述ではもうすこし後のことのように受けとれるが、老叔母たちの話題は、シモンの艶聞が中心で、相手の貴婦人の媚態に迷されてあまりいい気になりすぎた大伯父は、宮廷への出入りを禁じられ、無一文でその土地を追い出される、その逃避の行先地となっている。それは緊急避難のロン

ドン行きである。第二回の三年間の滞在時期は、これまでのシモンの生没年によれば死亡の直前ということになるが、すでにシモンが50才を越えようとする頃で、おびたしい世界遍歴の終りの旅にさしかかっている時期であり、長い放浪の旅をふり返ってみて、何のための旅であり、それによって何が得られたのか、あのローゼンタールがダルムシュタット図書館で見つけた旅券、身分証明書、飲食、宿泊料の受取り、バラバラの紙片に書きとどめられた女たちの名、それらのこまごましたものを含めた、日記、手紙、請願書の下書類をうち眺めながら、深い思いに沈みがちな毎日を送る時である。第三回の短い1777年ロンドン滞在は、当時フリーメーソン団と交友を持ったシモンが、逮捕後幽閉されていた団員、メクレンブルクシュトレリッツ方伯の弟、グーモン男爵の釈放を求めるために、秘書と王子ゲオルクと共に出かけた時である。この救援運動は失敗におわったけれども、このヘッセン＝ダルムシュタット家の寵を得て宮廷御用達の役をつとめていた時のシモンは、ユダヤ教秘術師としての名も広く知られていて、王家の望んだ後継者として男子出生の願い事にかかわり、見事その成果が達せられ、秘術師シモンは「宮廷秘術師」(Hofcabbalist)の称号を与えられるという、おまけがついてきたのである。

上に述べた三回のロンドン滞在は、シモン・ファン・ゲルデルンの四十年以上に及ぶ遍歴のほんの片鱗にすぎないが、そこには、シモンの活動の最盛期(1750～60年代)が除かれる形となるけれども、おおよそのその行動の特色を見ることが出来ると思う。第一回ロンドン行の終る1749年2月から、シモンの歩き出す足の方角は、49年6月、ミュンヘンからフランクフルト、50年、アムステルダム、51年には、アレクサンドリア(53、63年にも)、そして、初めてのパレスチナの聖地(51～53年)、ここから、トルコ、バルカン、ハンガリー、ウィーン、プラハ、バイエルン、パリ、エルザス、カッセル、ヒルデスハイム、ハノーバー、ブラウンシュバイク、ハンブルク、コペンハーゲンなどを経て、はじめてベルリン(56年)へ。さらにメモ帖の頁をあければ、56年二度目のエルサレム巡礼から、ヴェネ

チア、57年、ローマ、60年、二回目のパリ、62年、北アフリカ、63年、マンハイム、ハノーバーを経て、再びアムステルダム、64年、ヒルデスハイム、デッサウ、ライプチヒ、ドレスデン、そしてウィーン、69年、再びヒルデスハイム、この後に、第二回目のロンドンへ続く。そうして最後の約十年は、下エルザスのブックスヴァイラー (Buxweiler)。

日記その他から、シモンにはすぐれた文筆家の素質がうかがわれる。上述の町へはいるためには、それぞれ入国、滞在について、ユダヤ人シモンは許可を得なければならず、それに必要な請願書を書かねばならぬのももちろんである。ユダヤ人居住区域に手蔓を求めることは容易である。ベルリン、ウィーンほか多くで行われている。だが、これには限界があり、ここからがシモンの腕の見せどころとなる。さきに見たロンドン行きの前、ヘッセン＝ダルムシュタット侯家への出入りは、その一つの見本であるが、一つの町、あるいは国にはいると、シモンは、宮廷側近の貴族たち、それぞれの土地の出先き公館の高官たち、政・財界の有力者たちにまで巧妙に取り入り、外交官並みの手腕を心にくいほどに見せつける。これにもおまけがついて、王侯側近者の妻女を含めて、多くの貴族と上流の婦人、はては身分もよく分らぬ女たちに近づく、というよりも、よろこび迎えられる「男ぎ、男だて」を備えている。あの「東洋人」のキラキラひかる服、「騎士」を思わせる上品な礼儀作法、「カバリスト」のような、怪しい術の使い主、数ヶ国語に通じた能弁者。それはどれ一つを取ってみても、はじめて会った人には強い魅力であり、しかも、そうした牽引力が一つになってシモン・ファン・ゲルデルンの偉丈夫然とした体軀に集まっていたのである。そうして、さきにも述べた、さる貴婦人との情事を咎められて、お国ぼらいとなることも、かえってシモンの偉大さに箔をつけるようなもの、例えば、そこで産れたウィーンに滞在中の情事は、裁判沙汰にまでなつて、世話になったプレスブルグ家にも迷惑をかける。この一種の「つつもたせ」のワナに引っかかった事件で蒙った不名誉は、後のちまでシモンを苦しめる、すこしニガすぎる体験であった。女を愛したばかりではなく、

シモンは書物の愛好家でもあった。これはやはり、生活のいくらかの足しにするためにはじめた書籍売買に伴ってきたものであろう。「回想記」に述べられており、少年ハイネが見た聖譚曲のための「ホレブ山上のモーゼ」は、1750年代にパリで得た構想をまとめたもので、印刷はやはりロンドンであった。筆をとることの好きだったシモンは、日記類をいつかまとめ上げることを、最後の隠棲所では考えなかったであろうか。

何のための遍歴行であったのか、再びシモン・ファン・ゲルデルンに聞いてみたい。すぐ上に述べた、聖譚曲は、その出来ばえは別として、ユダヤ人としてのシモンの、素朴で純粋な神へ献げられる祈禱文であっただろう。また、パレスチナ行で、エルサレムのモリア山上で見たといわれる、あの「幻覚」は、おそらく新しくユダヤ民族が、ヨーロッパ世界の中で生きてゆく道を教示してくれる「新救世主」の姿に似ていたのではないだろうか。筆者はここで晩年の苦しい病床の中で、詩人ハイネが「メシア」の新らしい出現を夢に托するように歌った「ビミニ<sup>14)</sup>」(Bimini)の詩句を思い出す。シモンは、エルサレム巡礼を数回行っている。そこでイスラム教徒たちとも出会い、多くの同心者たちを知った。フランクフルトに限らず、パリその他のユダヤ教区をはじめ、財界の有力者たちからいくばくかの寄付金を必ず集めている。奉加帳を肌から離さないくらいだった。相場師とも言われるシモン、しかし自らの名を書き込めるほどの幸運は訪れなかった。それどころか、エルサレム巡礼から帰る途中、折角の寄金を盗まれたり、パリでは、多くの援助をうけた、ウィーンのプレスブルク家の末裔であるW.ヴェルトハイマー、この人は宮廷出入りの銀行家(Hofbankier)であるが、その銀行に寄付金を預けたと錯覚して、ヴェルトハイマーを苦しめたりする、奇行を演じている。何のためにシモンは寄金集めに立ち廻るのであろう。幼くしてユダヤ法典の勉強をはじめていたシモンにとって、法典そのものは、家を出てからもたえずその脳裏から離れず、祖父の建てたデュッセルドルクのシナゴグのことも忘れることは出来なかったで

14) Elster, Heines Werke (Biographisches Institut, 1924), 2-246ff.

あろう。もし相当の寄金が集められれば、従来の古い教会堂ではなく、新しいメシアを待望する、新しい世紀の教会堂建立を夢みはしなかったのであろうか。1760年代にシモンがパリを訪れる時、シモンはカトリック教区の司教たちに接近している。シモンがF. ヴォルテール(1694—1778)と修道院長アンリ・グレゴアール(1750—1831)を知るのは、このフランス宗教界でも信教の自由、ユダヤ人解放につよい関心を持っていた司教たちを通じてである。ジュネーブのヴォルテール山荘にシモンは過ごし、そこから、「七ヶ国以上も、もちろんフランス語も上手な、エルサレム近在生れのアラビア人」などと書かれたヴォルテールの紹介状を手にして、リオン、マルセイユの銀行を訪ねて行く。シモンの人柄とその行動の目的は、ヴォルテールによく理解されていたことがうかがわれる。フランス革命直前の国民集会の代議員であり、フランスのユダヤ人解放の恩人となった、エルザスのグレゴアール師の、1785年にメッツ (Metz) 王立アカデミーの懸賞論文受賞作となったユダヤ人論に、その疑問に一つ一つ答えて、このエッセーの基礎づくりに貢献したのはシモンであった。同じエルザスに互いに近く住んでいた、グレゴアール師との親交は、シモンの最後の数年を楽しいものにしたと思われる。そのユダヤ人解放に通ずる夢が、グレゴアールによって実現される日は、シモンの予想もしない早い日に到来した。それがシモンの描いた夢どおりのものであったかどうかは、その後の少年ハイネの時代を見れば分る。やがて少年ハイネも、「回期記」の中で、「わたしの生霊、わたしの分身 (Doppelgänger)」と呼ばれているシモンの夢を見つづけてゆくのである。最後にもう一つ、シモンのよく見る従姉たち、わけても「フラーチェ」の夢、これも少年ハイネの前に同じように現われてくるのである。このような大伯父シモンと詩人ハイネとのふしぎな類似性については、ブロートとローゼンタールの筆をまつまでもなく、シモンの生活を見れば容易に分る。シモン・ファン・ゲルデルンの事は、それを再構成すれば、ハイネ論とは別個に一つの長いドキュメンタリーになる。ここに書きつらねられたシモン像は、ほんの一部の資料によって得

られた何分の一かの小像にすぎないが、少年ハイネをいつまでも待たせておくわけにはわかぬ、やむを得ない結果である。